
『めるトモ』

徳次郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

『めるトモ』

【Nコード】

N2799C

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

転校して以来親しい友人を作れないでいた祐一郎は、通い続けていた学校図書館で受付をする汐里しほりと親しくなる。しかし彼女もまた、学校内に親しい友人はいなかった。メールのやり取りだけの友達『メル友』と通じ合う事で心の隙間を埋めていた汐里。しかし些細な事がキツカケでその相手とトラブルを起こしてしまう。

やがてそのメル友たちは、怒りを露に過激な文面を彼女に送りつけてくるようになった。汐里に相談された祐一郎は、次第にそのメールの相手の存在そのものに、不信感を募らせるが……【短期連

『めるトモ』

『めるトモ』

載

1【友達】（前書き）

残酷シーンなどはありません。ナチュラルホラーなので、肩の力を抜いて読んでいただけると有難いです。

1【友達】

引越し先へ向う自家用車は高速道路を降りるところだった。

全ての荷物は引越し業者の大きなトラックで運ばれる為、旅行にでも出たような身軽さだった。

何の変哲も無い白いミニバンは、家族三人で乗るには充分すぎるほどゆったりしていた。

父親は鼻歌混じりでハンドルを握り、母親は居眠りをしている。

彼は後部座席を独り占めして、見慣れない長閑な外の風景を眺めながら、i-Podで自分の気に入った音楽に聴き入っていた。

カーナビが目的地に向う為の高速の出口を、音声と画面で指示していた。父親はチラリとナビの画面をみて、再び鼻歌を奏でる。

ラジオに切り替えているカーオーディオからは昼のニュースが流れていた。

「昨夜、千葉県松戸市に住む　さんの長男　さんが自室で死んでいるのが家族によって発見されました。遺体に外傷はなく、部屋に何者かが侵入した形跡もないとの事で、死因を解明すると共に事件事故、両面での捜査が進められる模様です。尚、似たような事件が今年に入って各地で数件起きており、それらの関連性を追うと共に……」

それは、数ある事件や事故のニュースとして、ただ聞き流されるだけに過ぎなかった。

* * *

『めるトモ』

低い建物ばかりが目立つ町並みは、三方向から交わる高速道路に囲まれ、上空を覆いつくす水色の空は日本海に続いていた。

望月祐一郎もちつきゆいいちろうは高校二年生。この春この地に転校して来たが、クラスに溶け込むタイミングを外してしまい、親しい友人を作る事に失敗した。

元々一人が苦にならない祐一郎は、ついそのまま時を過ごしてしまい、もう衣替えも終えた初夏だと言うのに、休みの日に遊ぶような仲間もいなかった。

彼は週に三回ほど学校の図書室へ出入りしている。ほとんど一日おきだ。

本の好きな祐一郎は、以前の学校よりもかなり充実したこの学校の図書室を気に入っていた。

生徒数も少ない地方の学校図書館に、どうしてもこんなに多くの書籍が揃えてあるのか疑問さえ沸き起こる。

その日の放課後も、本を返すついでに何か借りようと図書室へ立ち寄った。

普通の教室を三つ繋げた大きさの室内には、天井に届きそうな高さの本棚が窓に対して直角方向にずらりと並べられている。

出入り口は一つしかなく、その近くに大きな整理棚を背にした受付カウンターが在る。

受付前の少し広いスペースには小さな丸テーブルと椅子が二組在った。

最初の本棚には図鑑や絵本が並んでいて、その陰に本格的な読書スペースが設けてあり、大きな長テーブルと複数の椅子が並んでいる。しかし、誰かの姿を見た事はほとんど無い。

その向こうには、奥までびっしりと本棚が並び、整理中の書籍は通路に無造作に積み重ねてある。

祐一郎は奥のハードカバーや文庫の棚をゆっくりと見て周り、気になる本を手にとってゆく。

そして、何時もより緊張した趣で受付に足を運んだ。

どうして彼が緊張していたかというと、今日こそは声を掛けようと心に決めている娘がそこにいたからだ。

いつも視線を下げて読書をしている彼女は、何かの時も必要最低限しか顔を上げない。

「キミ……」

祐一郎が差し出した本から図書カードを抜き取っていた彼女は、その声に反応すると、肩に着かない黒い髪を耳にかける仕草で視線を上げた。

「キミ、何時もここに居るけど、他に図書委員っていないの？」

それは、何時もカウンターで受付をしている娘に向けて言ったものだ。

図書委員は普通交代で当番をこなすはずなのに、彼女は何時来てもその場所にいるのだ。ずいぶん前から何度も問いかけようと思いつながら、今日やっと声を掛けた。

もちろん、視線をまともに交わすのも初めてだ。

「あたしが当番じゃ、不満？」

彼女はちよつとだけ笑みを浮かべて言った。

「いや、そう言うわけじゃ」

祐一郎は、初めて声をかける話題をそれにしただけで、彼女の仕事ぶりを問うものではなかった。

しかし、彼女は別に気分を害した様子無く、再び視線を図書カードに向けると

「他にもいるけど、みんなあたしに押し付けるの……」

「そりゃひどいな。先生に相談してみれば？」

「ううん、いいの。あたし本好きだし。本の匂いに囲まれてると、何だか落ち着くから」

彼女はそう言いながら、もう一度顔を上げると

「あなたも本が好きなのね」

何時も彼女が当番だから、祐一郎が頻繁にここへ来る事は当然知られている。

「まあ、そうだけど」

「あなた、春に三組に転校して来たんでしょ。友達いないの？」

彼女の率直な質問に、祐一郎は頬を紅くした。

「別に、友達なんていなくなつて平気さ。キミだって、親しい友達がいるようには見えないけど」

彼女が誰かと話している姿を、祐一郎は見たことがない。それは時々廊下で見かけるときも含めてだった。

「友達ならいるわ。学校の友達じゃないけどね」

「へえ、どんな？」

彼女は再び落ちた髪の毛を耳にかけながら

「そんなの内緒よ」

傍目の印象よりも、ずっと明るく笑う娘だった。髪の毛を耳にかけける仕草が癖らしい。

それ以来、祐一郎は彼女と頻繁に会話を交わすようになった。

今までも週に3回は来ていたのだから、いくらでも顔を合わせられるし、それを不自然とは思わなかった。

彼女の名前は柊木汐里^{ひいらぎしほり}。同じ二年生で、クラスが一組と言う事は、だいぶ前から祐一郎は知っていた。

この学校のクラスは二年と三年が四クラス。一年生は三クラスしかなかった。

「川崎って、どんなところ？」

「そうだなあ、工場が多いかな。住宅街は意外と閑静だけど……暴走族が多いかな」

「バイクの？」

「ああ」

「あたし、テレビでしか見たこと無いわ」

汐里は少しだけ楽しそうに笑うと

「でも、人はイッパイいるんですよ」

「それでも……まあ、ここに比べたらそうかな」

彼は、低い町並みを見渡すようにして言った。一瞬、東京との人口を比べてしまったが、そんな事はここでは無意味だと思った。

図書館の閉館間際までいた祐一郎が外へでると、梅雨時期特有の細い雨に景色は滲んでいた。

昇降口のひさしの下に立っていた彼に、後から汐里が声を掛けたのだ。

「傘、入っていく？」

傘にあたる静かな雨音が二人の耳に響き渡るほど、あたりは沈黙した情景に包まれていた。雨による湿気に、何時もは感じない汐里の香気が漂って、祐一郎の嗅覚をほのかに刺激する。

その日から祐一郎と汐里は、一緒に帰るようになっていた。

でもそれは祐一郎が図書室に立ち寄る日に限る事で、何を借りていくか迷っているふりをして四時半の閉館までいるのだ。

彼女を誘うためだけに図書室へ訪れる勇氣は、祐一郎には無かった。

白い肌がしおらしいほどに清楚なイメージを際立たせる汐里だったが、制服のスカートは人並みに短かった。

彼女は自転車通学だったので、途中まで二人乗りをしたりして時折お巡りさんに捕まったりする事もあったが、彼にとってはそれも楽しいひと時だった。

2【遙かなる友人】

学校で親しい友人を作らない柊木汐里には密かな楽しみがあった。家に帰ると真つ先にパソコンの電源を入れて、メールソフトを立ち上げる。昨夜来たメールをもう一度読み反して、丁寧に返事を書く。

学校での出来事、昨日読んだ面白い本やくだらないテレビドラマの事、街ですれ違った気持ち悪い男の事など、どんな話題を書いても、そこには彼女が共感し合える友達がいた。

汐里がメールをやり取りしている相手は三人いるが、三人とも趣味や考え方が似ていて、まるでストレスを感じない。

自分勝手な学校の連中に嫌気をさしていた汐里は、三ヶ月前に知り合った彼女達がいれば、もう学校に友達はいらないと思っていた。身の回りの出来事や好きなタレントの事まで何でも話し合える友達に、汐里はつい祐一郎の事を書いてしまった。それは決して自慢などではなかった。

直接笑顔を交わし合う身近な友達は、やはり汐里の心を癒してくれた。同じく彼女の心を癒してくれる友人に、その思いを報告したかっただけなのだ。

しかし彼女は、三人の友達と以前交わした約束を忘れてしまっていた。いや、軽視していたのかもしれない。

『めるトモ』

「学校以外での友達って？」

祐一郎と汐里が一緒に帰るようになってから、二週間が過ぎようとしていた。毎日一緒に帰るわけではないから、祐一郎にとってはあつという間の事だった。

彼の認識する日々は、何時の間にか汐里と一緒にの日だけになっていった。その他の時間は在っても無くてもいいようなものだった。それは、この学校に来て以来、汐里が最初の親しい友達だからなのか、彼女を好きだからなのか、祐一郎自身よく判らなかつた。

「えっ？」

「ほら、前に言ってたろ」

「ああ、あれね」

汐里は少し俯く仕草で言いよどんで、表情を曇らせた。

「彼氏……とか？」

祐一郎は今まで訊けないでいた事。そして訊きたかつた事を思いきつて口に出した。

学校内に親しい友人がいなくても、他に彼氏がいなくても限らない。もしかしたら、それで彼女は『友達』の事を話したからなのかかもしれないと思った。

「えっ」

汐里は俯いた顔を上げると

「うっん、そんなじゃない。みんな女の子の友達よ」

慌てるような口調でそう言った。

「そうか……」

それを聞いただけで、彼はホッと息をついた。相手が女性なら、それがどんな友達でも自分には関係ないと思った。

しかし、汐里は相変わらず浮かぬ顔をしている。

「どうかしたの？」

「実は……」

彼女は一度言葉を呑みこんでから、渋々口を開いた。

「実はあだし、メールをしている友達がいるの」

「そうなんだ」

メル友……世間一般にはそう言う友達を持つ連中はゴロゴロいる。それに、最近は携帯電話のメールなら誰だってやっている。

「よその学校の娘？」

祐一郎は軽い気持ちで訊いた。

汐里はコクリと頷くと

「でも、近くじゃないの」

「遠くの？」

彼女が再び頷く。

「一人は宮崎」

「宮崎って、宮崎県？」

「ええ。で、もう一人が名古屋、そしてもう一人が北海道なの」

祐一郎は、一瞬言葉を詰らせた。

確かにメールの友達は住んでいる場所を問わないが、まず会えるチャンスはなさそうな距離だと思った。新潟のこの町から見ると、どれもかなりの遠距離にあたる。

「みんな遠くの人なんだね。三人だけ？」

「ええ、でも最近何だか関係がギクシヤクして……」

彼女は再び言葉を呑み込んだように見えた。

「けんかでもしたの？」

メールのみでのやり取りは、文面の些細な取り違いなどで相手に不快感を与えてしまう事もある。表情や感情が直に伝わる直接会話と違って、文章だけの言葉は微妙なニュアンスが伝わり難いのだ。

顔文字や絵文字は、単に画面の装飾だけで無く、そういった感情の表現を補う役割も果たしている。

「言葉に誤解でもあった？」

「ううん、そういうのじゃない……たぶん」

汐里は小さく首を振ると、少し躊躇とまどいながら

「祐一郎さんの事、少しだけ書いたの」

「俺の事？」

「北海道の和実って娘なんだけど、彼女も本が好きで、だから本が好きな男の子と仲良くなっただって……それだけなんだけど」

汐里はみるみる顔を青ざめていった。

「彼女、その和実って娘はなんて？」

「メル友以外に友達是要らないって言ったくせに、嘘つきって……」
「そんな……メル友以外に身近な友人がいるのは当たり前だろ」
汐里は再び小さく首を振った。

「あたし、友達を作るのが苦手で、だから本当に親しい友達はいないの。だから雑誌に載っていたメル友募集に応募して」

彼女は恥ずかしそうにそんな話を続けた。

「だから、あたしたち、メール以外の友達を作らないと約束したの」
「あたしたち？」

「彼女も、身の回りに友達がいなみたいだった」

「そうか……だから、和実って娘は身近な友達を作ったキミに嫉妬してるんだ」

祐一郎は納得したものの、その感覚は信じられなかった。

遠くの親より近くの他人。と言うほどに、身近な人との交流は大切だ。もちろん、祐一郎自信、それを言う資格があるとは思えなかったたので、口には出さなかったが……

「とにかく、少しの間距離をとってみたいらどうだい？ その娘だつて、悪気があつてそんなメールを送ったんじゃないかもしれないし」
「ええ、そうしてみる」

汐里は祐一郎がメール相手の話題に触れた事で、忘れかけていた鬱屈うっくつした思いが蘇えつたらしく、彼と別れると、肩を落としたまま去って行った。

祐一郎はちよっぴり申し訳ないような思いで、彼女が最初の角を曲がるまでその後姿を見送った。

3 【気分転換】

「祐一郎くん、どうしよう」

昼休み、祐一郎は校舎裏の非常階段でよく昼食を取っていた。そこに、汐里が駆けつけて来たのだ。

最初は無言で隣に腰を降ろした彼女だったが、堪えきれないかのように言葉を発した。

「ど、どうしたんだ？」

「智子が……」

「智子？ それ誰？」

祐一郎は困惑して彼女に訊き返した。

「名古屋の娘よ」

「ああ、そうか。それで、その娘がどうしたの？」

「昨日の夜、彼女に和実の事を相談したの。彼女は和実の事を知っていて、もう一人のマリと三人で互いにメール交換してるの」

「マリってのは、すると宮崎の娘？」

汐里は黙って頷くと

「そしたら、今朝智子から返信が来たんだけど、私が一方的に悪いって。どうやら智子は私より先に、和実から話を聞いていたみたいなの」

「一方的にって言っても……」

「智子とも、メル友三人意外とは友達を作らない約束をしちゃったの」

「どうしてそんな約束を？」

「だって、あたし孤独だったのよ。やっと出来た友達を放したくなかったの。だから、あたしからそんな事を言ったのよ」

「でも、普通そんな約束したからって、他で友達作つたくらいでそんなに怒るかい？」

「あたしもビツクリして……」

祐一郎は彼女の話聞いて困惑するばかりだった。

「自分も友達を作るのは上手な方ではないが、それでも友達が他の友達を作ったくらいで怒りを露にする神経が理解できない。」

「まさかキミたち、レズとかの関係じゃ……」

その言葉が言い終わらないうちに、パンツと、祐一郎の頬に激しい痛みが走った。

「痛ってえ」

汐里が彼の頬を平手で打ったのだ。

「こんな時に変な事いわないでよ。やらしいわね」

「そうじゃないよ」

祐一郎は自分の左頬を抑えながら

「異常な嫉妬を抱くくらいだから、普通とは違うおかしい関係なんじゃないかと思って」

「そんなことないわ。ごく普通の友達よ。趣味の事を話したり、悩みの相談をしたり。だいたい会った事もないのにそんな関係になり得ないでしょ」

そう言った後、汐里は祐一郎が摩る頬に手を当てて

「ごめん、痛かった？」

祐一郎も彼女の仕草を受けて、怒る気にはなれなかった。

「それにしても、悩みの相談をし合うくらいなんだから、周りに友達が出来た事は喜んでくれるのが友達じゃないの？」

「あたしもそう思ってた。いくら他に友達作らない約束したって……でも、男の子と仲良くするのが許せないって」

「智子って娘？」

汐里は小さく頷いた。

「しばらく二人共時間を置いてみた方がいいね。それともう一人も「マリとも？」

「他の連中とも交流あるんだろ？ だったら他の二人から話がいってるかもしれない。マリって娘も、他の二人に共感してる可能性だってあるだろ」

汐里は再び頷くと

「そうね……」

祐一郎の言葉に、彼女の表情は大きな不安に呑みこまれたように曇った。

汐里はマリに救いを求めて仲介役を頼もうかとも考えていたのだ。しかし彼の言葉で、マリさえもが自分に中傷するメールを送ってくるのではないかと、途端に大きな不安が膨れ上がった。

「なあ、明日予定無かったら水族館でも行かない？」

祐一郎は彼女に気晴らしをさせてあげるつもりで誘った。そう考える事で、初めてのデートに彼女を容易に誘う事ができた。

「うん……」

「少し、メル友の事は忘れた方がいいよ。大丈夫、どうせ遠い場所で暮らす人達さ」

「そうね……」

汐里は少しだけ笑顔を浮かべると、落ちた髪の毛を耳にかけた。

翌日の土曜日、祐一郎と汐里は電車に乗って、大きなマリンパークに出かけた。

緑の木々に覆われた敷地内に大きな建物が聳え立つ。周辺には博物館もあって、県外からの観光客も集まる場所だ。

マリンパークから少し歩くと日本海を見渡せる海浜公園もあって、帰り際二人は日本海の夕陽を見ながらキスをした。

「あだし、高校生のうちに誰かとキスするなんて思ってもみなかった」

汐里は頬を赤くしながら呟いた。

「俺だって」

祐一郎も同じ気持ちだった。夕陽が全てを黄昏に染めて、お互い

の頬が赤い事は気にならなかった。

だから、二人はもう一度キスをした。今度は少し長く、汐里の口から戸息が漏れるほど、二人は長く唇を重ね合った。

4 【決裂】

月曜日、祐一郎は何気なく学校内で汐里を捜した。

昼食を一緒に食べようと思ったのだ。こんなに積極的になれるのも土曜日の事があつたからだ。

昨日の日曜日は一緒に街へ買い物に出かけた。

汐里はメールの事など忘れたように、明るい笑顔を見せていた。

しかし今日、彼女の姿は見当たらなかった。汐里と同じ一組の女子を呼び止めると

「柊木さんは？」

「ああ、そう言えば彼女今日来てないかな。あたしも今気付いたけど」

その娘は素つ気無くそう言つて廊下を歩いていった。

放課後図書室に行つてみるが、やっぱり彼女はいない。

初めて見る女子生徒が不機嫌そうな顔で、受け付けカウンターに踏ん返り返つて携帯をいじっていた。三年生のようだ。

仕方なく祐一郎が借りていた本を返すと、向こうも仕方なさそうに処理をこなすだけだったので、彼は早々に図書室を出た。

校門を出た祐一郎は自分の家には向わずに、汐里の家に直接向つた。

住所は知っていたが、彼女の家を訪れるのは初めてだった。

祐一郎の住んでいる住宅街へ入る通りを曲がらずに真っ直ぐ、駅前前の踏切を越えて国道を横切ると再び住宅街がある。

その辺り一帯は、祐一郎の住む住宅街よりもだいたい古くからあるよう、時折ねずみ色にくすんだ瓦屋根の古い平屋が姿を見せたり、小さな寂れた建物が立ち並ぶ市営住宅のようなものも見えた。

それから少し歩いた場所に彼女の家は在った。

オレンジ色の屋根に少しくすみはあるがオフホワイトの外壁。庭はブロック塀で囲われ、ごくありふれた二階建ての一軒家だった。

門柱には柅木の表札が掲げられて、インターホンは見当たらなかつた。門扉を抜けて玄関まで行きチャイムを押すが、誰も出てくる様子が無い。

庭先を覗いてみると、リビングらしき部屋のカーテンは閉められていた。二階の部屋を見上げても、何処もカーテンが閉まっている。「何処かへ出かけたのかなあ。何も言つてなかつたけど」

その時、二階東側の部屋のカーテンが微かに揺らいだような気がした。

祐一郎は再び玄関のチャイムを押してみた。

少しすると、内側からガチャガチャと鍵を開ける音がしてドアがゆっくりと細く開いた。

「祐一郎くん？」

「ああ、俺だよ。どうしたの？ 具合でも悪いの？」

細く開いたドアから覗く汐里の顔色は暗くてよく見えなかったが、何だかよそよそしい彼女の仕草に彼は思わずそう言った。

「一人？」

汐里は細い隙間から祐一郎の後方を覗つた。

この時外から差し込む光で彼女の顔がはっきりと見えしたが、真つ白と言つよりも何処か青ざめていた。

「あ、ああ。そうだけど」

そこでようやく彼女の全貌が覗えるほどにドアが開いた。

「どうしたの？」

汐里は酷く脅えている様子にも見えしたが、体調が悪い風でもあった。

「大丈夫？」

さつきから何度と無く質問する祐一郎だったが、汐里はそれに答える様子がない。

「何かあつたの？」

「入つて」

汐里に促されて祐一郎が玄関に入ると、彼女は外を見渡して素早

くドアを閉め、再び鍵を掛けた。しかも、チェーンロックまで嵌めている。

祐一郎はその仕草を見て、何だか解らない不安が込み上げた。「何があつたんだい？」

汐里の行動がなんだか異常に見えて、祐一郎は訊かずにはいられなかった。

「彼女達が来るのよ」

「彼女達？」

「和実と智子よ」

「えっ？」

「昨日の夜メールが来たの。シカトしたって許さないって。謝罪の返信もよこさないで知らん顔してる卑怯者だって……二人共異常に怒ってた」

汐里の身体が小さく震えていた。

「今からそっちへ行って、直接話しをつけてやるって。あんたの態度次第でどうなっても知らないって……あたし怖くて」

「二人共ここへ来るって？」

汐里が頷いた。

祐一郎は、彼女の肩を抱き寄せて

「大丈夫だよ。そんな事でわざわざ北海道や名古屋から来ないだろう。ただの脅しだよ」

祐一郎は彼女を促してとりあえず玄関を上がると、階段を上って汐里の部屋へ入った。

女性の部屋に入るのは初めてだった。

何だか花のような、穂のかに甘い香りがした。

ベッドには山吹色のカバーが掛けてあった。二人はそこへ腰掛けて、汐里の小さな肩を、彼は優しくさすった。

「大丈夫、彼女達は来ないよ」

それでも汐里の震えは止まらなかった。

「祐一郎くん、もっと強く抱いて。抱きしめて。あたしを守って」

「大丈夫だ。大丈夫だよ。もし彼女達が来たら俺が守るよ」

祐一郎は強く彼女を抱きしめて唇を塞いだ。

心なしか、彼女の体の震えは収まっていった。それでも汐里は祐一郎にしがみ付いていた。

彼にはどうして彼女がこんなに脅えるのか解らなかったが、次第にそんな事はどうでもいいような気持ちになっていた。

あまりも間近で香る汐里の身体から発する清楚な女性の匂い……それが祐一郎の思考をただの男へと変化させていったのだ。

両腕を祐一郎の身体に強く絡ませた汐里のＴシャツに、彼はそつと手を忍ばせた。

彼女もそれを拒みはしなかった。

彼と身体を交える事で、祐一郎の体温を直に感じることで、汐里は自分を支配する不安と恐怖から逃れようとしたのかもしれない。

窓の外は西日が空を紅く染め上げて、部屋の中はほの暗かった。

携帯電話の着信音が鳴り響いて、数秒でそれは消えた。

祐一郎は自分のではないと直ぐに認識する程度だったが、汐里はベッドから飛び起きて身体を震わせた。

「彼女達だわ」

「彼女達？ て、メル友の？」

「今朝から携帯にもメールの着信がくるの」

「前はパソコンだけだったの？」

「ええ、あたし携帯のメルアド教えてないのに……」

汐里は掛布のタオルケットを引き寄せて身体を包むようにして震えた。

『めるトモ』

祐一郎は彼女の机の上にある携帯電話を手にとって
「見てもいい？」

汐里は無言で頷いたので、祐一郎は彼女の白い携帯電話を開いた。
『裏切り者／／／裏切り者／／／裏切り者／／／裏切り者／／／裏切り者／
／／／裏切り者／／／裏切り者／／／裏切り者……』どれだけ
画面スクロールを繰り返しても、ページ一面に果てしないほどその
文字は綴られていた。

5【踏み切りの向こう】

翌日、祐一郎は汐里との余韻が尾を引いているかのように、学校でも終始明るく振舞っていた。

もちろん、彼女の抱えているトラブルは気の毒に思いつし、出来る限り助けになるつもりだが、彼女と身体を交えた嬉しさがその問題を楽観的に捉えていた。

しよせん遠くにいるメル友なんて、いくら怒ってたって何か相手に損害を与えたわけでもないのだから、そのうち縁が切れるだけだ。祐一郎はそう考えていた。

だから、今の状況で汐里の不安と恐怖の気持ちを取り除いてやれば、自然に事は解決すると思っていたのだ。

「祐一郎、お前一組の柊木と付き合ってるんだって？」
クラスの男子が声を掛けてきた。

「いや、別に付き合ってるわけじゃあ」
「よく声掛けれたな。どうやったんだ」

三浦幸裕は、興味深々といった感じだった。

「柊木は可愛いけど、なんか影があるっていうか、暗いだろ。近寄りづらいし……みんな話したくても声を掛けられないでいるんだぞ」

三浦は羨ましそうに、祐一郎に向かって言った。

「実際声をかけて撃沈された奴もいるしな」

確かに汐里は少し影があると言うか、人を寄せ付けないオーラを放っていると言うか、祐一郎自信も、散々図書室に通いながらも声を掛けあぐねていたのは事実だ。

いつも俯き加減な視線がそう思わせるのか、あまりにも飾り気のないシンプルさがそう感じさせるのかは判らないが……とにかく、手を触れてはいけない無垢なイメージはある。

三浦が言うには、柊木汐里は密かに男子の間では人気があるのだそう、清楚なイメージと誰とも親しくしない孤高のイメージが妙

にそそのるのだという。

しかし、勇気を振り絞って気さくに声を掛けてみても、それは彼女には軽薄に映るらしく片言であしらわれるのがほとんどだそう。確かに祐一郎自身も、彼女がたまに見かけるだけの存在だったら、絶対に話しかけられなかっただろう。

だからこそ、今日の祐一郎は上機嫌なのだが……それを誰にも言えないもどかしさは、彼に微かな優越感をもたらした。

しかし、彼女がどうして彼に心を開いたのかは本人にも解らない。長いこと図書室へ通っている祐一郎に、汐里も何時の間にか親近感が沸き起こっていたのかも知れない。

何時もは誰かに話しかけられても、話が盛り上がり直ぐに離れていく。彼はそんなつもりは無いのだが、対応が貧相でおざなりなのかも知れない。

転校して間もない頃はみんながひと通り話しかけてきたにも関わらず、誰とも親しくなれなかったのは、少なからずそう言う事だろう。

しかし、昨日の出来事に酔いしれ、周囲の人間に微かな優越を感じている今日の祐一郎は終始陽気で、クラスの誰に声を掛けられても笑いが沸き起こった。

「あいつ、案外明るいじゃん」

「けっこう話易いよね」

今日声を掛けてきた男女共に、そんな言葉を発していた。

「ちよつと、せっかく二人いい雰囲気なんだから、そつとしいて上げなさいよ」

しつこく汐里の事を訊いてくる男子に見かねて、そんな風に祐一郎を庇う女子までいた。

しかし、放課後に気付いたのだが、柗木汐里は今日も学校へは来ていなかった。

携帯電話への異常なメールが続いているのだろうか。いや、着信拒否するように彼女にいったから、それは大丈夫だろう。

パソコンは……パソコンのメールもアドレス否定するように設定してあげればよかったか……しかし、彼女たちが、つまり一時的に怒りを露にしているメル友が仲直りのメールを送ってくる可能性だってある。

もし、相手の娘が異常にヒステリックな性格なら、一時的な行為かもしれない。祐一郎は、汐里の為にも明るい希望を僅かながら残しておきたかった。

彼は、汐里の携帯電話にメールを送ってみようと思ったが止めた。メールに脅える彼女をさらに脅えさせるような気がして、気が引けたのだ。

「祐一郎、一緒に帰ろうぜ」

昇降口で三浦が声を掛けてきた。

三浦は何となく話し易さでは一番だった。以前から時々は会話を交わす相手だったが、一緒に帰るなんていうのは、もちろん初めてだ。

「今日、柊木は休みだった？」

「ああ」

「昨日も休んでたって」

「そ、そうだな」

三浦はニヤニヤしながら祐一郎の背中をパンツと叩いて

「まさか、彼女妊娠したんじゃないだろうな」

「ま、まさか。そんな事俺たちしてないから」

祐一郎は昨日の事が頭を過り、慌てて否定した。まったくの嘘だが……

「なあ、柊木ってどんな性格なんだ？」

三浦は相変わらず汐里に興味を抱いている。しかし、何も祐一郎から横取りしようとしているわけではなさそうだ。

「いや、話してみると普通だよ。意外とよく笑うし」

「へえ、ちきしょう。いいなあ、お前」

祐一郎は三浦にそう言われて、正直悪い気はしなかった。

「あれ、そう言えばお前の家も、こつち？」

駅前通りまで来た時、三浦が言った。

「あ、俺しお、柊木の家に行ってみるから」

「おお、そうか。俺も付いて行きたいけど、ま、ガマンするか」

三浦はそう言ってから

「じゃあな」と、気さくに手を上げた。

三浦と別れた祐一郎は、彼と反対方向へ歩いて踏切を越えた。

6【メール】

汐里の家の玄関で、祐一郎は昨日と同じようにチャイムを鳴らした。家中のカーテンは閉め切っており、やはり少しの間は物音ひとつしない。

それでも昨日の事があるので彼は少し外で待ってみると、ドアの内側で開錠する音が聞こえた。

「俺、祐一郎だ」

彼はドアが開く前にそう言った。

それでもやっぱり汐里は、最初ドアを細く開けて外を確認する。

「大丈夫、俺しかいないよ」

汐里はドアを開けて玄関の中に祐一郎を引き入れると、思い切り抱きついてきた。

「ど、どうしたんだ？」

「マリが、マリがあたしを殺しに来るって……」

彼女の肩が震えていた。

「マリって、宮崎の？」

彼女は祐一郎に抱きついたまま無言で頷いた。それは髪の毛の揺れで判った。

「昨日の夜、マリからメールがあつて……和実と智子から話は聞いた。あたしに黙ってるなんて許せない。親友だつて言つてたくせに、携帯メールの着信を拒否したりして、あなたの行為そのものが許せない。だから今からあんたを殺しに行く……そう書いてあつたのよ」「そんな無茶苦茶な……」

祐一郎は半ば信じられなかった。どれだけヒステリックな女性だろうと、そんな事で人を殺すはずが無いではないか。

はるばる宮崎県から新潟県まで人を殺しに来るなんて、そんなバカな話があるはずがない。

そんなメールに本気で脅えて学校にも来ない汐里が、なんだか気

の毒に感じる反面少し気味悪くも思った。

しかし、だからと言って彼女を見捨てるわけにはいかなかった。

「携帯のアドレスは三人のうち誰にも教えてないんだろ？」

「ええ」

「どうして解ったんだらう」

「そんなの知らない……」

汐里の部屋に行くと、彼女は祐一郎の身体にしがみ付いて離れなかった。

「彼女たち異常よ……きつと異常者なんだわ」

自然にベッドへ倒れこんで抱き合っただましばらく彼女をそっとしておいた。しかし、彼女は祐一郎を放そうとしない。

汐里の両親は小さい頃から共働きで、彼女は何時もこの家に一人であつたらしい。祐一郎も一人っ子だったが、小さい頃は従兄が近所に住んでおりよく遊んでもらつた。それでも、家に一人でいる夕暮れ時には淋しさが込み上げたりもしたものだ。

彼女は自分でも知らないうちに、誰かに縋りたい気持ちを押し殺して今まで過ごして来たのではないだらうか。

そして、メールのやり取りできる友達を見つけた。しかしその相手は今、脅迫めいた中傷文を送りつけてくる。その事が今まで隠し持っていた彼女の不安や寂しさを一気に増幅してしまったのかもしれない。

そう思うと、祐一郎は汐里の背中に回した手に力を込めるのだつた。

カーテンの隙間から見える外の景色が漆黒に変わった頃、ようやく祐一郎はベッドから降りる事ができた。

汐里の境遇がどうであれ、彼女をここまで脅えさせるメールとはいつたいていどういふものなのか。

祐一郎は、昨日携帯に届いたメールを見ただけで、確かにそれは

異常だったが……他は汐里に話を聞いたただけだ。パソコンに届いたメールの文面を直接見たわけではない。

もしかして、パソコンに届くメールはそれほどに恐ろしい文面なのかもしれない。

「なあ、彼女たちからのメール、俺に見せてくれない？」

「えっ……でも……」

汐里は戸惑いの表情を見せた。

相手のメール以上に、自分のメールを見られるのが憚はばるのだろう。

「プライバシーなのは判るけど、何か解決策が見つかるかもしれない」

祐一郎にそう言われて、汐里は渋々ながら机のノートパソコンの電源を立ち上げた。

メールソフトを起動させると、KAZUMI、TOMOKO、MARIと、三つのフォルダが作つてあるのが見えた。

返信済みのメールはそれぞれ相手別に振り分けているそうで、先週から返事を出していない彼女たちからのメールはまだ受信フォルダにそのまま残っていた。

「あたしのは見ないでね」

「えっ、ああ、大丈夫。彼女達のメールしか見ないよ」

祐一郎は慣れた手つきで受信フォルダを開いた。そしてメールの内容を見た瞬間、思わず驚愕した。

何気ない汐里との会話が、彼の心の準備を解いてしまった為、その脅威は倍増されていた。

和実からのメール。それは文面を読むまでも無く異常なものだった。

フォントの大きさが滅茶苦茶で大きかったり小さかったり、それは行ごととか、部分的とかではない。

まるで新聞の切り抜き文字を寄せ集めて作った手作りの脅迫文のように、隣り合っている文字すらも大きさと書体の種類がまったく違っているのだ。

明朝体10・5サイズの隣にいきなりゴシック体で50サイズを越える大文字。そしてそのとなりに行書体20サイズほどの文字、そしてポップ調の隣に今度は楷書体で再び大文字……と、その変換に規則性は感じられない。中には見た事も無い書体もある。

そんな文字列が画面全体を埋め尽くしているのだ。いかにも常軌を逸した感性が覗える。

そして「許せない」や「ムカつく」という文字は赤い色フォントが使われていて、他の文字も所々にカラーフォントが使われていた。その狂気に満ちたヴィジュアルは、確かに何ともいえない恐怖を醸し出していた。

異常な怒りを露にしたメールは、和実から四通、智子から三通、マリからは二通届いていた。

そのどれもが、異常なフォントの使い方をしている。マリのメールに関しては、汐里が言った通り『殺す』と言う文字が、やはりバラバラの大きさと綴られていた。

三人は相談して似たような手法をとっているのか？ その共通する異常さに、祐一郎は疑問を抱いた。

それぞれのメールを眺めていた祐一郎は、ふと何かに目を止めると「なんだか俺、喉が渴いちゃってさ。悪いけど何か飲み物ないかな？」

汐里に向かってそう言った。

「わかった、何か持ってくるね」

彼女はそう言ってドアを開けると

「あたしのメールは見ないでよ」と念を押してから部屋を出て行った。

祐一郎が傍にいる事で、汐里は何時もの落ち着きを取り戻していた。

パタパタと彼女が階段を下りて行く音を確認してから、祐一郎は再びメールの画面を食い入るように見つめた。

これはいつたい……

『めるトモ』

7【同一人物】

彼が見ていたのは、各メールの差出アドレスだった。奇妙な事にそれが和実も智子も、そしてマリも同じなのだ。

三人は同一人物……？

確かに、電子メールの場合は郵便の手紙と違って消印が無い為、所在地を偽ってもまったく確かめる術がないのだ。

大手プロバイダのアドレスなどは、地域区分を使っている場合もあるが、彼女たちのアドレスは何処でも発行しているフリーアドレスだった。

三人とも文体は若干違っているが、フォントの大きさが滅茶苦茶な所や色フォントを使っている点は同じだった。

フォルダを開けて三人の今までのメールを見る。

春からの膨大な量のメールがそこにはあった。

それでもこちらは整った普通のフォントを使い、フレンドリーな文面だ。所々に各人の方言や独特の語尾が入っているが、そのぐらゐの小細工は成りすましならやるだろう。

何よりもメールアドレスが同じと言う事は、同じ人物である可能性が非常に大きい。もともと見ず知らずの三人が、わざわざ複数で同じアドレスを共有するとも思えない。

これなら、この三人がお互いに話を聞いたと言って共感しあうのも頷ける。

相手は元々一人なのだから、和実も智子もマリも同じ感情で汐里を攻め立てるのは当たり前前的事だ。

着信メールを次々に開いて観覧していた祐一郎は、一番初めに着信したメールを見て再び疑問が沸き起こった。

『メールしませんか』タイトルはそう書かれていた。

そして自己PRが綴られ、最後に『よかったですらお返事待ってます』と書いてある。いかにも好感の持てる文体だった。

汐里は何かの雑誌を見てメル友の応募を見つけたと言っていたが、どう考えてもこれがメールを始めるきっかけになった文面だ。

彼女はいきなり送りつけてきた相手とメールを始めたのだろうか？ それとも、メル友募集をしたのは、本当は汐里の方なのか？ それに対して送ってきたメールとも考えられる。

それならこの最初の文面も頷けるが……いや、違う。もしそうならこのメールに雑誌で見た事が綴られていてもいいはずなのに、それらしき文面は無い。

やはりこのメールはいきなり届いたものか？ それに汐里は返信したのか？

いろいろな思考を巡らす祐一郎は、再三画面に向かって目を凝らした。

「そんな、バカな……」

今度は思わず声に出た。

振り返って汐里がまだ来ない事を確認すると、次々にメールを開く。何かの間違い、パソコンの表示エラーかとも思えたからだ。

これだけのメールを見ていて全く気付かなかった。それは、あまりに確認するに値しない部分だったから、視界に入り込んでも意識的に見ようとはしなかったのだろう。

今見ているのは着信先、つまり汐里のメールアドレスだった。

普通なら確認する必要なんて無い。このパソコンに着信したメールなのだから、その着信アドレスが汐里のアドレスで当然だ。

しかし、確認せずには要られなかった。

汐里のメールアドレスが、他の三人のものと同じだったからだ。

祐一郎は汐里がダメだと言っていた送信フォルダも開いてみた。こちらにも三人それぞれに返信フォルダが分かれていた。

そして、やはり全てのメールアドレスは同じものだった。

和実、智子、マリ、そして汐里が同じアドレス。つまり、それらのメールの差出と宛先は全て同じアドレスだ。

それが何を意味しているのか、祐一郎は考えるのが怖かった。

静まり返った彼女の部屋に、祐一郎は背筋を伝う悪寒のようなものを感じた。

この嫌がらせメールを出したのは、汐里本人……いや今までのメール全てがそうだ。

つまり、彼女は自分宛に自分でメールを書き、それらをメル友と呼んでいるという事になる。

それなら、教えていない携帯電話のメルアドを知っていても不思議ではない……自分自身でメールを打っているのだから。

祐一郎の額には、冷たい汗が浮き出していた。もちろんそれは初夏の陽気のせいなどではない。

ここで、彼女がこのフォントの大きさの違う異常な文面をタイピングしているのかと思うと、思わず鳥肌が立った。

突然部屋のドアが開いて、彼は心臓が縮む思いで振り返る。

汐里の姿を見て、無言で息をついた。

「何かわかった？」

小さなお盆にサイダーの入ったグラスを二つ乗せた汐里が、ゆっくりと部屋へ入って来た。

「いや……まだ何ともいえないな」

祐一郎は流れる汗を気取られないように、静かに笑ってみせた。

そして、急いでメールソフトを閉じてパソコンの電源を落とす。

「そうかあ……」

白い首をうなだれて、汐里が残念そうに呟いた。

「気味悪いメールだったでしょ」

「あ、ああ……酷いもんだね」

汐里の言葉に、祐一郎はさり気ない素振りで返した。

……彼女は自分で気付いていないのか？ 自分のしている事が判らないのだろうか。それとも俺をからかって密かに楽しんでいるのか？ 祐一郎には何もかも解らなかった。

「なあ汐里。メル友を見つけた雑誌って、まだ在るか？」

テーブルにグラスを置く彼女の手が止まった。

「雑誌？」

「メールの相手は、雑誌で見つけたんだろ」

「それが……」

汐里は言いよんだ。

「無ければいいんだ。別に」

祐一郎は、彼女の困惑した表情が何となく気の毒になってそう言い返した。

「実は、彼女たちは雑誌で見つけたわけじゃないの」

「じゃあ、どうやって？」

「ある日、いきなりメールが来たの。メールしませんか？ って」

「ある日いきなり？」

「そんなのに返事を返したなんて言ったら、何て言われるか判んないし……だから、雑誌で見つけたって嘘を言ったの」

「そ、そうか」

……ある日自分宛にメールを出した。と言う事だろうか。さつき見た通りなら、そう言う事になるのだろう。

彼女はある日突然他人に成りすまして、自分にメッセージを宛てたのだ。しかも、自分で知らぬまに？

祐一郎は憂い彼女の顔を見つめて、サイダーの入ったグラスを手にした。

さつき喉が渴いたと言ったのは嘘だったが、今はカラカラに渴いていた。

8 【送受信】

「それだけでは、何ともいえないなあ」

電話の向こうの声が言った。

祐一郎には、東京で精神科の医師として働いている従兄がいる。年は離れているが昔はよく遊んでもらったものだ。

年が離れているとは言え、従兄の孝作もまだ二十代。医師としてはまだまだ見習いのようなものだった。

それでも何か助け舟が欲しくて、祐一郎は彼に電話したのだ。

汐里の異常ともとれる行動と、普段のあまりにも普通な彼女のギャップが、祐一郎に計り知れない不安をもたらしていた。

「でも孝ちゃん、自分で自分にメールを出して、それらと言い争いになるなんて、俺には理解できないよ」

「普段の彼女の行動はどうなんだ？」

「特におかしな所なんてないんだ。普通の女子高生だよ。そんな事で俺をからかうようにも思えないし」

「そうか。とにかくしばらく様子を見るんだな。架空の友達と縁を切る為の、彼女なりの手段かもしれない」

「縁を切る手段？」

「いままで、彼女は架空の友達とメールで親しくする事によって寂しさを紛らわしていた。そこにお前が現れて彼女の心はお前に引かれた。もう架空の友達はいらないわけだ」

「うん……そうかなのかな？」

「例えばだよ。しかし、彼女の中でいままで世話になった架空の友人たちに対して名残惜しさがある。いや、引け目を感じているのかもしれない。そこで、喧嘩して決裂する事によって、彼女なりにそれらを消し去ろうとしているのかもしれない。完全に架空の友達が彼女の頭の中から消えれば、それで終わるかもしれないよ」

祐一郎はそう言われて、少しだけ気持ちが楽になった。

「わかった、少し様子を見るよ」
「何かあったら、何時でも電話しろ。夜中でもな」
孝作はそう言っただけで電話を切った。

翌日、汐里は学校へ来たようだ。廊下を歩いている姿をチラリと見かけた。それでも祐一郎は、周囲にクラスメイトがいる前で、汐里に堂々と声を掛ける事は出来なかった。

「彼女、今日は学校に来てたな」

三浦幸裕が声を掛けてきた。

彼は冗談っぽく笑うと

「なあんだ、妊娠じゃないのか」

「だから、違っただけ」

「判った判った、冗談だよ」

三浦はそう言っただけで、祐一郎の肩を撫でた。

「なあ、三浦はメル友っている？」

「メル友？」

彼は少し怪訝な顔をする

「メル友やってる奴ならバリバリいるぜ。ていうか、仲いいやつはみんなやってるよ」

「いや、メル友だけの友達は？」

「メル友だけ？」

三浦は眉間に少しシワを寄せて、さらに訝しい顔をした。

「そんなのいないって。誰だか知らないやつとメル友だけしたって詰らないじゃん」

彼は祐一郎の机にポンツと飛び乗るようにして腰掛けると

「知らない奴と話したけりゃ、掲示板がチャットするっしょ。普通」

「そう言うもんかな」

「まあ、掲示板で親しくなって直メってのも在りなんだろうけど。なんだよお前、メル友募集中か？」

三浦が再びふざけて笑った。

放課後に図書室へ行くと、汐里が何時もの受付カウンターに座っていた。

「その後どう？」

祐一郎はわざと明るく彼女に声を掛けた。

「あつ、祐一郎くん」

彼女は何か考え事でもしていたのか、ハッと顔を上げた。

「うん、あれからはまだ何も無いけど……」

「そう」

祐一郎は安堵の笑みを彼女に向けて

「そんなもんさ。あまり深く考えたらバカみるぜ」

昨日自分がメールを見たことで彼女も安心したのだろうか。今のところ汐里は自分宛にメールを出してないようだ。

「今日も一緒に帰ってくれる？」

汐里は何かに縋り付きたいような視線を、祐一郎に向けた。

「あ、ああ。イイヨ」

彼はそう言つて図書室の中で時間を潰した。

それから毎日彼女と図書室で待ち合わせて一緒に帰った。その頃には普通の生徒はみな下校が終わっているし、部活をしている連中はまだ終わっていないので、比較的周囲を気にする事無く彼女と一緒に正門を出る事ができた。

祐一郎が汐里の家に入ると、直ぐに彼女の部屋へあがる。そして身体を交える日々が続いた。

汐里は人肌が恋しいかのようにそれを受け入れた。

今自分が見ている彼女、その裏側にもう一人の人格が存在するなと言ふ事が、祐一郎には信じられなかった。

真つ白な肌の全てをさらす彼女と交わる間は、そんな困惑から逃れる事ができた。

「祐一郎くん、あたし少し眠るからしばらくここにいてね」
夕刻、汐里はそう言って眠りにつく。

最近夜に眠れないそうだ。やはりメル友がもたらした恐怖感が拭えず、精神的に不安定になっているのだろうと、祐一郎は思った。

本当に彼女は自分自身であるの三人を作り出しているのだろうか……自分で自分にメールを送る異常さは今でも信じられない。それに普段の彼女はあまりにも正常で普通なのだ。

この問題が一筋縄では解決しないような気はしていた。しかし、せつかく手にした汐里を、祐一郎は手放したくはなかった。

それは、事あるごとに三浦が羨ましがる素振りを見せるのも一つの要因だった。おそらく彼は汐里の事が好きなのだろう。

その汐里を自分で抱く優越感から、もはや祐一郎は抜け出すことは出来そうになかった。それが愛だとか恋だとか、そんな事を考える余裕は今の彼にはなかった。

ふと、祐一郎は汐里の机のパソコンに目が止まった。

彼が傍にいる安堵が、夜中によりほど眠れないのか、彼女は静かなと息をたてながら吸い込まれるように眠りに落ちて行った。

祐一郎は彼女のパソコンの電源を立ち上げると、メールソフトを開いた。

……汐里自信が架空の彼女たちに出した返事はあるのだろうか？
素朴な疑問が彼の頭を過ったのだ。

汐里が本当に自分でメル友を演じているのなら、もし返信しても結局は戻って来るはずだ。

受信フォルダにはそれらしい記録はない。しかし、和実、智子、マリそれぞれ三人の小分けされたフォルダに入った受信メールは、確かに返信した履歴のマークが付いている。

この返信したメールは何処へいったのか？

送信済みメッセージフォルダにも、確かに汐里が送信したメールが残っていた。文面からして彼女達に送られたものだ。

アドレスはやはり、送受信共に同じだった。

それなら、彼女は三人から来る事になるそれぞれのメール文章と、自分の返信文章の両方を送信していたのか？ でもそうしたら、送信済みフォルダに架空の彼女らのメールがあってもおかしくない。彼女が送信して、初めて『メル友』からのメールが届くのだ。しかしそれらは見当たらなかった。

しかも、『メル友』宛に返信で送ったメールも、次の受信で結局は戻ってくるはずなのに、何処を捜してもそれは見当たらない。

……無意識にそれらは削除しているのか。

削除済みフォルダにももちろん見当たらないから、おそらく完全に消去しているのだろう。

自分が書いて送信した架空の三人のメール文章の送信履歴、そして自分が三人に返信して戻って来た受信メール、このややこしい仕分けを必要とする削除も、それらは無意識の行動でしかないのだろうか……

祐一郎は混乱する頭を抱えて、パソコンの画面を見つめた。

9 【増殖】

祐一郎は汐里のパソコン画面を一心に見つめていた。

本当に、これらは汐里の自作自演なのだろうか……僅かながらに祐一郎に疑問が沸き起こる。

自分の知らぬ間に他人となって自分にメールを送る。しかもその相手は三人もいるのだ。そんな事がありえるのだろうか……

しかし四人が同じアドレスで、これも問題なくメールのやり取りができるはずが無い。ありえない。

設定によって同じアドレスを複数のパソコンで使用する事は確かにできる。しかし、そんな事したら、送信してサーバーに置かれたメールは宛名を無視して、次に最初に繋いだ人のパソコンに入ってしまう。

それこそ、送った本人に帰ってくる場合もある為、合理的とは思えない。

「うっん……」

汐里が僅かに身体を動かしたのを見て、彼はパソコンの電源を落とした。

* * *

「そうか……そんなややこしいことを彼女は無意識に……」
受話器から聞こえる孝作の声が言った。

「無意識でそんな事するのかな」

「ありえない事じゃないさ」

電話の向こうが一瞬沈黙した。

「彼女は、時々性格が変わったりしないかい？」

「特に……少なくとも俺の前では。ただ、今はメールに対して異常に脅える程度かな」

「人が変わったように？」

「いや、そこまでじゃないと思うけど」

祐一郎はそう応えてから不安が広がった。

「やっぱり、病気なのかな？」

「まだ判らないけど、多重人格障害の可能性もあるな」

「多重人格？」

「正確には解離性同一性障害……それなら、他の人格が行動している間の記憶が無いのは辻褄つじつまが合う」

いくら辻褄が合っても、祐一郎にはショックな事には変わりなかった。

「じゃあ、汐里の中には他に三人の人格がいると？」

「いや、そうとも言えないな。もうひとりの人格が三人を演じている可能性もある」

「もう一人が三人を？」

本当の人格でもない者がそんな複雑な行為をするのか？ 何だか

気味が悪い……祐一郎は孝作の話聞いて正直そう思った。

「治るの？」

「難しい場合もあるが、きちんと治療すれば治る場合も多い。さり気なく病院の受診を進めてみたらどうだろうか」

孝作が優しい口調で言った。

「精神科に行けなんて言えないよ」

「ま、俺は電話でしかアドバイスできないから、いざとなったら覚悟を決めて言ってみるんだな。それが彼女の為でもある」

多重人格障害……？ 汐里が？ 普段はそんな素振りはない。しかし、同じアドレスでメールをやり取りしてる以上、意識的、無意識的にしろ彼女が受けたメールは彼女が配信したものに違いない。

いくら他の要因を探しても、彼はそれを見つげ出す事はできなかった。

ここ数日おとなしいのが救いだっただ。このまま何事もなければ、彼女はもう自分宛にメールを書くことも無いかもしれない。

その夜、祐一郎はそんな事を考えながら、何時の間にか眠りに引き込まれていった。

しかし、深夜遅く祐一郎の携帯が鳴った。

彼は半ば寝ぼけたまま電話を手にした。

「祐一郎くん、大変なの。あたしどうしたらいいの……」

その電話の相手が誰からなのかは、声で直ぐに判った。

「汐里か？ どうしたんだ？」

「メールが、メールを送ってくる相手が増えるの」

「えっ？」

祐一郎はまだ半分寝ぼけていた為、彼女の言っている意味が理解できなかった。

「どうしよう。どうして知らない娘が増えるの？」

「ちよつ、ちよつと待って。どう言う事？」

彼はここでようやく眠気を振り払って、上半身を起こした。

「さっきメールチェックをしたら、知らない娘から……マリたちの言う通りあなたは最低だ……どうして？」

「知らない娘って？」

「だから知らない娘だつてば。いままでメールだつてやった事のない娘よ」

どういう事だ……ていうか、そんな友達でもない娘からのメールは完全に無視すればいい事だ。しかも、アレだけ中傷メールが来ていたにも関わらず、彼女はわざわざメールチェックをしているのか？

いや、彼女にしてみれば、『メル友』が仲直りのメールを送ってくるのを待っているのかもしれない。

それを、自分自身が出しているとも知らずに……

「大丈夫だよ。そんなわけの解らない娘からのメールは気にしなくていいよ」

「でも……彼女も三人の仲間に加わるって。彼女、きっと元々マリの友達なんだわ」

汐里は息を切らす勢いでまくし立てた。

……そうじゃないんだ。マリはキミ自身なんだ。だから、その友達もキミなんだよ。祐一郎は言葉を飲み込んだ。

「大丈夫だ。電話では詳細も解らないから、明日話そう。明日そのメールを見て考えよう。大丈夫だ、俺が付いてるから」

祐一郎はひとつ息をつくと

「だから、汐里もちゃんと明日学校においでよ」
「うん……」

彼女の声は遠くで小さく聞こえた。

「汐里？ 判ったかい？ 明日学校で会おう」

「判ったわ。ゴメンね、こんな真夜中に……」

「いや……いいよ。少しは落ち着いたかい？」

「ええ。もう大丈夫よ。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ。じゃあ、明日、いやもう今日だね。学校でな」

汐里もクスリと小さく笑ったような気がして、祐一郎も安心した。

彼は、汐里が電話を切るのを確認してから自分の携帯を切った。

しかし、翌日汐里は再び学校を休んだ。
悪い予感はしていた。

祐一郎は不安を抱えたまま、放課後何時ものように彼女の家に向
った。

朝から低い雲で覆われた空から、パラパラと雨粒が落ちてくるの
を感じて、彼は途中から早足を小走りに切り替えた。

小さな扉を抜けて、汐里の家の玄関に駆け込んだ時には雨脚は
だいぶ強くなっていた。

チャイムを何度か鳴らすと彼女が玄関のドアを細く開ける。

祐一郎は思わず溜息をつきたい気持ちだった。

その光景は、まるつきり先週に逆戻りだった。せつかくここ数日
は何事も無く落ち着いていた汐里は、再び身体をガタガタと震わせ
ていた。

玄関に入ってドアを閉めると、外の雨音は完全に遮断されて、今
まで外にいた祐一郎には家の中の静けさが不気味にさえ感じた。

「マリが、智子が来るって。あたしを許せないって……五人であた
しを殺すって」

汐里は祐一郎に強くしがみ付いて震えた。

「ちょ、ちよつと待って……五人て？」

「今朝増えたのよ」

「また増えたのかい？」

「どうなってるの？ どうしてみんなであたしを責めるの？」

汐里は脅えていた。肩が小刻みに震えて、それが祐一郎の身体に
も確かに伝わった。

「大丈夫さ。ただの脅しだよ」

彼の雨で冷えた身体には、震える汐里の体温さえ生々しく温かか
った。

「今度は違うわ。新潟の駅を降りたって、さつきメールが来たのよ」
「駅からって事は、携帯から？」

「だと思っ。きつと携帯からパソコンに送って来たのよ」
それを聞いて、祐一郎はハツとした。

そっだ。彼女たちの携帯のアドレスはどうなってる？ 以前見た時はそこまで確認しなかつた。全て汐里一人が行っている行動なら、汐里の携帯アドレスかパソコンのアドレスのはずだ。

祐一郎は、未だに彼女が自分で自分にメールを送っていると言う事が信じられなくて、携帯から送られて来たメルアドは全く違っアドレスであつて欲しいと願つた。

心の何処かで、汐里が正常なのだと微かな希望を捨てきれずにいる。

「来て」

汐里は、立ち竦んだまま思惟する祐一郎の手を強く引くと、自分の部屋へ上がった。

「見て」パソコンの電源は入っていた。

彼女はメールソフトを立ち上げてメールを開いて見せた。

「いま新潟に着いた。絶対コロス！ 家は判っている。逃げてても無駄だ」

やはりフォントの大きさはバラバラだった。いちいちフォントをこんなにバラバラに変えるのは面倒だと思っが……しかし、祐一郎はふと気が付いた。

これは携帯からではない。携帯のメール機能にフォントを変える機能は無はずだ。

アドレスを見ると、それは汐里のパソコンのアドレスと同じだった。

……これは、やはり汐里が打つたものなのか？

昨晩から何通か着信しているメールも開いてみた。深夜に届いた娘は美奈恵、今朝届いた娘は由貴子と名乗っていた。確かに二人増えている。

「彼女達は来るわ。ここへ向ってる。あたし、どうしたらいいの？」
汐里は錯乱寸前だった。

「助けて、祐一郎。あたしを守って」

「大丈夫だ、落ち着け」

祐一郎は声のトーンが上がる彼女を宥めるようにして、頭を優しく撫でると

「いいかい、俺の言う事をよく聞いて。これから俺の言う事を信じて」

汐里はしゃくり上げる声に涙を拭いながら顔を上げると、祐一郎を見つめた。

祐一郎も覚悟を決めた眼差しで、正面から汐里と視線を合わせた。日没にはまだ間があるのに外はほの暗く、一層激しくなった雨音が窓ガラスを荒々しく叩いていた。

「このメールは、全てキミ自身が書いたものなんだよ」

11【メル友】

汐里は、彼の発した言葉の意味が判らないという顔で、祐一郎を見上げていた。

彼は汐里をパソコンの画面へ促すと

「ほら、よく見て。送信者と受信者のアドレスが同じだろ。これはここから送信したメールがここに戻って来た証拠なんだよ」

「そんなの嘘よ」

「アドレスが証明してる」

「だって、あたしはこんなメール書いてないわ」

汐里は激しく首を振って否定した。乱れた髪の毛が頬に張り着いている。

「キミが忘れてるだけなんだ。いや、気付いていないと言うべきなのか……でもこれはキミ自身が書いたんだよ」

「そんなの嘘よ。あたしは絶対に書いてない。自分で書いた事を忘れるわけないでしょ」

「じゃあ、どうしてアドレスが同じなんだい？」

「そんなの、あたしが知るわけないでしょ。あたしは来たメールに『返信』をクリックしてメールを打つだけだもの。最初からそのアドレスだったわ。あたし、パソコンはあまり詳しくないし……そう言う偶然もあるんだと思って気にしてなかった」

「ありえないんだよ。アドレスが他人とまったく同じなんて。そんな事はないんだ」

祐一郎は思わず大きくなる声のトーンを少し落として、優しく言い聞かせた。

「メールアドレスは、ある意味個人を示すんだ」

汐里は少し落ち着いた様子で、頬についた髪の毛を指で後にかき上げる。それでも唇が震えていた。

「キミは知らないうちに架空のメル友を作ってしまったんだ。」

自分で友達を演じていたんだよ」

「そんな……」

彼女の声は、雨音の喧騒でかき消されそうなほど力ないものだった。落とした視線は床の何処か一点を見つめている。

汐里の落胆した姿に、祐一郎は力になりたいと思った。

「一度、病院へいって診てもらおう。俺も付き合っから」

「でも、あたしには全然身に覚えがないわ」

「きつと、そういう病気なんだよ。精神的な病はそう言う場合もあるらしいんだ」

汐里はどうにも納得いかない様子だったが、とりあえず顔を上げると

「じゃあ、和実も智子もマリも、あたしを殺しには来ないの？」

「ああ、来ないよ」

「美奈恵や由貴子って娘は？」

「来ないよ、誰も来ない。彼女達はみんなキミの中にいるんだ」

祐一郎は静かにそう言った後「ご両親は？」

何時もは気にならない不在の両親が何時帰って来るのか、今日の祐一郎は気がかりだった。

「お母さんは何時も8時ごろ帰ってくる。お父さんは出張で月末にならないと帰らないわ」

「じゃあ、お母さんが帰るまで、俺がここにいるよ。それなら安心だろ」

汐里は頷いて、祐一郎に抱きついた。

「あたし、頭がおかしくなったの？」

「違うよ。心の病気だよ」

「あたしを嫌いになる？」

「ならないよ。直ぐによくくなる。そしたらまた一緒に何処か遊びに行こう」

祐一郎は震える汐里の身体を強く抱きしめた。

彼女はよくなる。きつと元に戻ると自分に言い聞かせた。

何時の間にか激しい雨は止んで、外は少し冷たい風が吹いていた。祐一郎は、汐里の母親が帰るまで彼女の傍にいた。母親が帰る頃は、健全性をアピールする為にリビングへ降りて一緒にコーヒーを飲んでいた。

汐里もだいぶ落ち着いて、何事も無かったように振舞っていた。

「じゃあ、俺帰るから」

「あら、夕ご飯食べていけばいいのに」

汐里の母親は気さくにそう言ってくれたが

「いえ、ウチでも自分の分を用意してると思うので」

そう言って、祐一郎は彼女の家を後にした。

母親には汐里の事は話さなかった。汐里が明日何と言って母親から保険証を借りるか、それは彼女に任せた。

彼は家に帰ってやるべき事もあった。汐里が何処の病院へ行ったらしいか、孝作に相談しようと思っていたのだ。

「祐一郎くん……」

見送りに出た玄関先で、汐里は不安を露に言った。

「あたしを一人にしないでね」

「ああ、あたりまえじゃん。明日の放課後病院へ行ってみよう。だから、明日は学校へ来いよ」

祐一郎の優しい言葉に、汐里は小さく頷いた。

家に帰って、さっそく孝作に電話すると、留守電になっていた。医療研修会との事で、明日まで留守だそうだ。

夕食は母親と食べる事が多いが、遅い時は一人だ。父親は何時も

帰りが不規則なので、食べたり食べなかったり。今日もまだ帰宅していない。

「最近よく電話してるけど、何処に掛けるの？」

電話を終えて食卓に着いた祐一郎に、ご飯をよそった茶碗を手に母親が訊いた。

「ああ、孝ちゃんさ」

「あら、こっちに越してからは全然連絡取ってなかったじゃない」
母親はそう言いながら、彼に茶碗を差し出した。

「ああ、最近ちよつと相談に乗ってもらってるんだ」

「あんたまさか、学校でいじめにでも遭ってるんじゃないでしょうね」

「そんなわけ無いだろ」

祐一郎はご飯を頬張りながら

「学校の友達が悩んでさ。孝ちゃんに力になってもらってるんだ」

「そういえば、孝ちゃん精神科医だったわね」

そう言いながら、息子の食事の世話を終えた母親はリビングへ行ってテレビの前のソファに座った。

祐一郎は夕飯を食べてから自室へ戻ると、パソコンで精神科の病院を検索した。評判のいい病院は、やはり東京に集中していた。

……汐里は、彼女は明日学校へ出てくるだろうか？ まあいい、来なければ自分が迎えに行けばいい事だ。

彼女の為にも、少し離れた場所の方がいいだろうか……

祐一郎はそんな事を考えながら、市内近郊の精神科クリニックの一覧を眺めていた。

「祐一郎、電話よ」

階下から母親が駆け上がって来ていきなり部屋のドアを開けた。様子が何時もと違っていているのが判った。

「柘木さんて方から……」

母親は息子にそう言ってから「何だか様子が変わよ」

祐一郎は汐里からだと思って、二階の廊下にある子機でそれを受

けた。

「望月くん？ 汐里が、汐里が……」

それは汐里ではなく、彼女の母親からの電話だった。その声は酷く取り乱していた。

「汐里がどうしたんですか？ おばさん？」

「汐里に何があったの？ 望月くん知ってるんでしょ？ 教えて、汐里に今日何があったの？」

彼女は息を荒げて言った。

「汐里がどうしたんですか？」

「うっ……汐里が……」

「汐里がどうしたんです？」

祐一郎は何度でも訊きかえした。それを聞かない事には話が進まない。しかしその先には、絶望に満ちた言葉が待っていた。

「死んだわ……汐里は死んだのよ！」

汐里の母親は、電話の向こうで泣き叫んでいた。

祐一郎は血の気が引いて目の前の色彩が無くなるのを感じた。電話の声が途端に遠くなって、モノクロの視界は直ぐに真っ暗になり、思わず廊下の壁に背中を預けた。

電話の向こうでは立て続けに汐里の母親が何かを叫んでいたが、彼は立ちくらみを堪えるので精一杯だった。

汐里は祐一郎が帰った後、母親と一緒に夕食を済ませてから自室へ上がって行った。それからしばらくして、母親が彼女に風呂へ入るように声を掛けにいったところ、死亡していたのだと言う。

身体に外傷は無く、誰かが部屋へ押し入った形跡も無い。

彼女は自分の机に突っ伏して、パソコンの電源を入れたまま眠るように死んでいたそうだ。

死因が解らない為、汐里は司法解剖に回されることになった。

祐一郎は混乱していた。

「いったい汐里に何が起こったのか……まさか、本当に和実や智子、マリは実在していて彼女を殺しに来たのか？ そんなバカな。

ありえない。あのメールは汐里が書いたものだ。そのはずだ。

それに、誰かが部屋へ侵入した形跡は無かったと言う事だ。彼女にいったい何が起こったのか……

「とりあえずは、司法解剖の結果を待つしかないね」

孝作は電話でそう言った。

「大丈夫かい。彼女は気の毒だったな。俺も時間を見ていちどそっちへ顔を出すよ」

その言葉は少しだけ心強かった。

祐一郎は汐里の死の真相に対して、大きな疑問を抱かずにはいらなかった。それゆえに、彼女の死を純粹に悲しむ余裕すら無かった。

彼女が突然いなくなった悲しみよりも、その不明な原因に困惑していたのだ。

『めるトモ』

その週末に孝作は祐一郎の家を訪れた。

「殺されるかもしれないと言う思い込みが、彼女を殺してしまった

のかもしれない」

孝作は精神科の医師らしく、終始落ち着いた口調だった。

「自分で自分を殺してしまっただって事？　つまり汐里は自殺したと？」

祐一郎は二つのコーヒーカップにインスタントコーヒーを作ってテーブルに置くと、腑に落ちない顔で呟くように言った。

「自殺とは違うかもしれない。もう一人の、いや複数かもしれない他の自分に殺されたんだよ」

「でも、彼女が多重人格だったとしても、外傷も何も無かったんだよ」

「想像妊娠って知ってるかい？」

孝作はコーヒーの入ったカップを手にして言った。

「想像妊娠？」

「女性が妊娠したかも知れないと強く思い込む事でお腹が膨らむんだ。本当の妊娠みたいだね。人によってはちゃんと母乳まで出始める場合もある」

「汐里も強い思い込みで、死んだと？」

「ありえなくはない。多重人格とは関係ないけど、昔ある国でこんな実験をしたそうだ」

孝作はコーヒーを一口啜ると、カップを置いて続けた。

「椅子に縛りつけた男の目の前で実験用マウスに毒を注射して、それが死ぬ姿を一部始終見せる。そしてその後、男にも同じ毒を注射すると告げ、注射器を身体に刺す。男は恐怖で極度の緊張状態になる。ただ、実際に男に注射したのは微量の生理食塩水で、本来身体に害はない。男はその後どうなったと思う？」

孝作は自分のコーヒーに砂糖を少し足すと、再び一口啜った。

「何も起こらないんじゃない？」

祐一郎は思ったまま即答した。

「数十秒後、男は激しく痙攣を起こして死んだと言う話だ」

「無害な生理食塩水を注射したの？」

「目の前でマウスが毒を打たれて実際に死んだ事、そして、男に注射されるのも同じ毒薬と告げられた事で彼の脳と身体は完全にそう思い込み、それが症状に現れたんだ」

「そんな事が？」

「ありえない。と言う言葉は祐一郎の喉元で留まった。」

「彼女はメル友が実在して自分を殺しに来ると思い込む事で、自分の中の他の人格の力を強めてしまった。そして、その人格は彼女を殺そうと、自分は殺されると……その両方の思い込みが不幸な結果を招いたのかもしれない」

そう言った後、孝作は手元のコーヒーを飲み干した。

祐一郎には信じられない事だった。思い込みで人が死ぬなんて……彼は少し冷めかけたコーヒーをまずそうに飲んだ。

孝作は汐里に焼香する事も無く日曜の昼間に東京へ帰って行った。祐一郎は悲しみに打ちひしがれて日々を過ごすという事はなかった。この街へ来て、彼女と過ごす時間は彼にとって特別だったはずなのに、それ以上に不可解な事が多すぎたのだ。

それでも時間が経つにつれて彼の中に悲しみがふつふつと沸き起った。彼女を何とか救えなかったものかと言う自責の念に、祐一郎は追い立てられた。

結局司法解剖したにも関わらず汐里の死因は解明されなかった。

死亡原因は推定心臓麻痺と暫定された。

かなり遅れて葬儀が行われ、その分四十九日はあつという間にやってきた。

祐一郎は、汐里がいなくなってから学校の図書室には出入りしなくなった。

一度だけ放課後を通りかかって中を覗いてみたが、一年生らしき女子生徒が当番をこなしているだけで、当然のようにそこには汐里の姿はない。

夏休みは何となく過ごす中で何時の間にか終わりを告げた。クラスメイトの三浦は、なにかと祐一郎を気に掛けてくれて、一度だけ一緒に海へも出かけた。

彼女のいなくなつた空虚な感情も、月日の流れと共に祐一郎の中から少しずつ溶け出して消えていった。

見上げる蒼空そらは日を追うごとに高くなり、日本海から吹き付ける潮風も次第に冷たくなって、既に二学期も半ばに差し掛かっていた。夕食後、自分の部屋へ戻つた祐一郎は、とりあえず明日からの中間審査に備えて机に向つたが、けっきょく何時ものようにタバコを啜すえて火をつけた。

それは、汐里を失つてから覚えた行為だった。

最初は肺には入れずに口の中で煙を止めて吐き出すだけだったが、今では肺一杯に吸い込んで、黄な粉色の煙を吐き出す。

パソコンの電源を入れてメールの受信を行うと『4件』の表示が出た。

一つはプロバイダからのもので、直ぐに削除した。

他の三件のメールは、同じタイトルが着信一覧に表示されていた。『メル友になりませんか』そんなタイトルが三つ。ポインタを合わせると画面の右側に本文が表示された。

「どうせ新手的な出会い系か何かだろ」

祐一郎は溜息混じりでそう呟くと、何時もするように文面もろくに読まずに削除しようとした………が、途端にその手を止めて画面を食い入るよう見つめた。

まるで木綿に水が吸い取られるように血の気が引いて、彼の顔色はみるみるうちに蒼白に変わっていった。

「……そんなバカな」

開いた唇に吸いかけのタバコがへばり付いていた。それを灰皿でもみ消すと、思わず自分の両目を強く擦り上げる。

混濁した意識が漆黒の夜空へ溶け出して、自分の信じていたもの、いや医師である孝作の推測さえも根本から瓦解していった。

汐里は正常だった。

彼女は多重人格でも、精神錯乱でもなかった。彼女が言っていた事は全て事実だったのだ。

「何だ……何なんだこれは」

それらの三件のメールは全て、差出のアドレスが祐一郎のものと同じだった。

「何なんだ、お前ら……」

和実、智子、マリ……見覚えある三人の名前を見た瞬間、全身にゾワゾワと鳥肌がたった。

祐一郎は遠く果てしない闇に、何処までも引きずり込まれるような気がした。

凍雲いてぐもに覆われた夜空そらからは初雪が音も無く静かに舞っていた。

街路灯に照らされたその結晶は、淋しげな光の粒となって、ひらひらとアスファルトに落ちては幻ゆめのように消えてゆく。

祐一郎はほの暗い部屋で今夜もパソコンに向ってキーを打ち込む。点けっ放しのテレビからは深夜のニュースが流れていた。

「今年に入ってから各地で不審な死亡事件が相次いでおり、今回で15件目となりました。どの事件も被害者は自室で亡くなっており、その死因はいまだ説明されておりません。今回の事件を受けて広島県警では………」

何時の間にか祐一郎の『メル友』は六人に増えてしまった。

そして彼は、彼女達の機嫌を損ねないように毎日届くメールに返信を繰り返しているらしい……

それが生き抜く術だと知っているから。

了

12【新着】最終話（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

『めるトモ』

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2799c/>

『めるトモ』

2008年8月29日17時50分発行